



通信

No. 54

2014年 秋号

発行：子育てサポートくるみ

住所 羽曳野市壺井508-1

TEL 072-957-3282 FAX 072-958-4089

<http://kosodate-kurumi.com>

「子育てサポートくるみ」は、共同保育園を運営し、学童保育、障がい児保育、障がい児通所支援事業、子育て支援事業を行っているNPO法人です。

子どもを育むのに大切な「自然・環境」「食事」などにこだわりを持ち、全国や海外からも注目されています。緑豊かな環境や、ひのきの床の園舎、広大な園庭を、ぜひ一度見に来てください。

「花には太陽、子どもには平和を」

この言葉は、さくらさくらんぼ保育園 創設者 齊藤公子氏が好んで著書にサインされていた言葉です。斎藤先生は生前、さくらさくらんぼ保育園での公開保育や宿泊研修などで、保育者に対して、文学についてや齊藤先生の生い立ち、さくらさくらんぼの歴史を通して、平和についての学びをもたらさせていただきました。北関東保問研第5回総会（1966年）では、このように語られました。「大勢の人たちの命を捧げさせるという戦争をやらせてはならない。物語の本質を鋭く見つめることの出来る科学的な子ども、そして、どんな権力にも屈せず、正しいと思ったことは主張できる子ども、つくられた社会に順応していく子どもではなく、みんなで力を出し合い助け合ってゆく子ども、そんな子どもをつくってゆくために・・・中略・・・手探りで新しい保育を考え始めたのです。」斎藤先生は、そのような子ども像を目指し、さくらさくらんぼ保育を創り、発展のため力を尽くされました。

私達も斎藤先生の遺志を受け継ぎ、保育実践を積み上げています。乳児期は「よく食べ、よく眠り、よく遊び」という丁寧な生活を積み上げたからだづくりと、人との関わりを大事にしています。学童期には「生きていくのに何を大事にしていくか」を保育者と保護者が一致させることが重要だと考えています。その価値観の一つを子どもたちに伝えたいという想いで、5、6年生には「沖縄への平和学習」を1990年から隔年で行い、2009年からは「広島への原爆・平和学習」も始めました。実際に見る戦跡や体験の話を聞いて、肌で戦争を感じると、子どもたちの姿は変わります。「死」という言葉への考え方や使い方も子どもたち自身が配慮するようになっていきます。歴史を事実から学び、平和を考える機会を10歳を越えた子どもにつくることは、くるみの大人の役割として継続していきます。

くるみ保育園 園長 山田房江



くるみでの水あそび

くるみの子どもは、一年を通して水を使ってあそび姿を目にしたいと思います。その中でも夏は、子ども達が思う存分水あそびができるようにと考えています。『ようやく自分の力で移動できるようになった幼い子どもは、いったいどこに向かっていくのか？じっと観察したことのある人は、どの子も“水”を求めて動き、“水”を発見したときは、いのちがけの様相で突進していくのに気づかれることと思う。～中略～どの子も、どの子も、ひたすら“水”を求め、“水”に惹かれ、無我夢中になって“水”の感触をこころよがる。これはあたかも本能とよばれるもののようにさえ思える。(ヒトが人間になる 齋藤公子著 “子どもと水より”)』と書かれているように、自ら水を求めていく姿を目にします。水に抵抗を感じ、水慣れに時間を要する子どももいますが、どの年齢でも子どもの様子を見て、段階を踏み、水あそびを楽しめるようにと工夫しています。

0歳児では、うつ伏せであそべるようになった子どもに、浅い‘たらい’に水をためると手でパシャパシャと水の感触を楽しみますし、ずり這いの子どもも、自ら水を求めていこうとする為、部屋前の段差にハイハイ板を設置して自分で水場まで這って行けるようにしています。ハイハイができる子どもには水の中で動き回ってあそべるくらいのプールを、部屋前あたりで子どもが自分で行ける距離に用意します。

今年の1歳児の夏始めは、丸太のプール(子どもが四つ這いした時に肘の半分くらいが浸かる深さ)で、ハイシ・カメ・両性ハイとリズムをしたり、大人とゆさぶりあそびをしたりと楽しんでいました。毎日あそぶことで、より水あそびが楽しくなり、夏の終わりには2歳児があそんでいる丸プール(子どもが立って太ももあたりが浸かる深さ)が楽しくなり、その中で‘イルカのジャンプ!!’を得意顔で見せてくれます。

2歳児は丸プールで、潜ってあそべる子ども、顔に水がかかっても平気になった子どもと、水慣れも子どもによって異なる為、どの子も楽しめるように午前・午後と水の量を変えています。

3歳児からは大きいプールに入ります。潜ったり、飛び込んだり、水中ジャンケンをしたり、宝探しをしたりと色々なあそびの中で、どんどんダイナミックに水であそべるようになっていきます。今年から広く新しくなったプールで、さらに新しいあそびをと、机を用いてジャンプ台にしたり、即席スライダーにしたりしたあそびも大人気でした。また、小学校のプール(園より深い)も体験します。



[プールで]

そこで、4歳児は‘浮く’ことにも挑戦します。5歳児は7月の海合宿を経て、小学校のプールで息継ぎして泳ぐことに挑戦し、25mを泳げるようになった子どももいます。

毎日の水あそびから、昨日まで怖かったことが今日、顔に水がかかっても平気になった！潜れるようになった！水の中で目が開けられるようになった！泳げるようになった！とそれぞれ子ども自身が実感し、それが自信に繋がっていくと子どもの姿から感じます。夏にたっぷり水で遊び、自信を得て心も身体もひとまわりたくましくなった子ども達です。それが秋から野山をかけめぐるエネルギーとなります。

保護者のコーナー

○ くるみ学童 広島平和学習に参加しての感想

8月4日から5日、くるみ学童高学年の広島平和学習に参加させていただきました。4日の午前中は平和資料館の見学、午後からは教員を退職されて、平和ガイドボランティアをされている脇田先生の案内で平和記念公園の碑めぐりをしました。平和資料館は親子で学習という形で、ゆっくり見る事が出来ました。資料館には原爆投下前後の広島の模型と写真、被爆者の遺品や写真、そして現在も核兵器を保有している国が9カ国あり、核実験が行われているという現状が目に見えてわかるように展示されていました。被爆者の遺品がおかれている部屋には、69年前の8月6日、「行ってきます」と家を出て、8時15分、原子爆弾により一瞬にして命を奪われた子どもたちの遺品が並べられていました。一緒に展示を見ていた娘は「恐い」と言って部屋を出て行きました。

午後からは、脇田先生から広島と長崎に投下された原子爆弾の違い、何故原子爆弾を広島に投下したのか、などのお話を聞いた後、平和記念公園の碑、爆心地、原爆投下の目標地点であった相生橋、そして原爆ドームをまわりました。当時、広島には10万人の韓国人が労働力として連れて来られており、そのうち2万人以上が原爆で亡くなられたとの事で韓国人原爆犠牲者慰霊碑がありました。碑を甲羅の上にのせた石亀が韓国の方向を向いています。「魂は祖国へ帰れますように」。日本が始めた戦争で韓国にしてきた加害の実態を感じずにはいられないとても悲しい碑でした。たくさんの折り鶴が飾られている原爆の子の像。2歳で被爆し、12歳で白血病を発症し亡くなった佐々木貞子さんの像。10年たって、発症する放射能の恐ろしさ。「鶴を千羽おれば病気が治る」と信じて亡くなる3日前まで折り続けた折鶴が貞子さんの顔写真と共に平和資料館に飾られています。原爆ドームの前を流れる元安川。原爆が落とされ、瓦が真っ黒に焦げる程の熱線と、家がとばされる程の爆風の中、たくさんの被爆者が水を求めて飛びこんだ川。海の潮の満ち引きで海に流された死体が重なり合い川に戻ってくる光景。今もこの川に眠っているお骨がたくさんあるとの事です。人口35万人、うち12万人以上が亡くなった8月6日の広島。実際に来ないとわからない、想像できない、あの日の広島を、被爆者のくやしさを、生々しく肌で感じる事が出来ました。平和公園碑めぐりの最後は原爆慰霊碑でした。「安らかに眠って下さい。過ちは繰返しませぬから」の碑文。日本は戦争で核爆弾が使われた唯一の被爆国。たくさんの命を失って、「戦争はもう絶対にしない」の思いから出来た日本国憲法9条。この平和を残していく為に自分自身が出来ること、私達の世代に託された言葉だと感じました。

5日は似島少年少女のつどいに参加しました。毎年、広島県の教員が中心に実行委員会を立ち上げ、開催されているこの平和学習は今年で40年を迎えるそうです。この似島は検疫所があった島で日清戦争など日本兵がアジア諸国へ出兵する時と帰還した時はここで病気がないか検査し、治療してから故郷へ帰って行った島だったとの事です。始めに、実行委員長が、「日本がアジア諸国にしてきた加害の面とあの日、たくさんの被爆者が治療を求めて似島に渡り1万人以上の方が死んでいった被害の面を学んで欲しい」と挨拶されました。

グループにわかれて似島の戦跡をめぐるしました。小学生コースは弾薬庫跡、陸軍歩哨塔、弾薬庫へのトンネルを、人間の手でつくられた土塁の上を歩きました。ジャングルのような茂みの中をかき分けて登っていくと、弾薬庫の跡地がありました。10年前に老朽化を理由に弾薬庫は撤去されてしまったそうです。その後、参加者全員が集まって慰霊碑前で慰霊祭を行いました。この慰霊碑の場所は陸軍野戦病院があった場所だそうです。次々と被爆者が運ばれてくる中、医療薬品も底をつき、麻酔なしで手足を切断し、窓から放りなげるしかな

かったとの事です。放り投げた手足は窓の棧まで積み上がったそうです。慰霊祭の後、軍馬を火葬する焼却所跡に行きました。戦後は官舎になっていたとの事ですが当時の様子を知る人達の証言から、8月6日以降、この馬の焼き場から煙が出ていたという事を聞き、10年ほど前に官舎を移して発掘作業をした結果、人骨がたくさん出て来たとの事です。隠してしまうかのように当時の施設などが取り壊されており、年々戦跡が減ってきているとの事でした。

昼食は似島小学校の体育館でお弁当を食べました。40年前にこの似島少年少女のつどいを立ち上げ、ご自身も被爆者であり、教員でもあった米田先生と中学2年生の時に被爆され、弟2人を失った80代の男性のお話を聞かせていただきました。その男性は3歳の弟が目の前で死んでいき、勤労働員されていた真ん中の弟も行方不明。10年程前にこの似島で当時、弟が通っていた中学生服のボタンが発見されたと聞き、それ以来、関東から毎年8月は、この似島を訪れておられるそうです。年の離れた、甘えんぼうの弟で、名前を呼ばれてもきちんと返事すら出来なかったのに、あの日、家の下敷きになった弟を励ます為に名前を呼ぶと「はい」と答えたそうです。助けて欲しい、その一心で「はい」と叫び続けた3歳の弟を目の前に助ける事が出来なかった無念さ、その罪悪感を、感じながら今まで生きて来た、と話してくださいました。米田先生は、5歳の時に入院中に被爆されたそうです。母親と必死で逃げる時の広島光景は地獄絵のようだったと語ってくれました。高校生の時に、少年ジャンプで「はだしのゲン」を見た時、まさに自分が逃げたあの光景の描写そのもので衝撃を受けたとの事です。中沢啓治さんもあの日、自分と同じ道を通って逃げたのだという事をあの漫画で知ったとの事です。ご両親は原爆症で亡くなられたそうです。じわじわとやってくる放射能の影響。次は自分の番だとおっしゃっていました。

最後に、実行委員の皆さんが「似島」の歌を歌ってくださいました。この似島で見た事、聞いた事、感じた事を忘れないで欲しい、そして語りついで行って欲しいという思いで作られた歌だそうです。実行委員会の終わりの挨拶。「今日は雨でした。この40年、広島この日は雨が降った事はありません。暑い、暑い広島8月を体験して欲しかった。あの日の暑さはこんなものじゃなかったんだよ、と言いながらこの似島を歩きたかった。自分たち実行委員は、毎年8月は皆さんをこの広島に迎える為に予定を入れません。たくさんの人達に広島にきてもらい、戦争の残酷さ、命の尊さを伝え続けていきたいと思っています。」

子ども達5人の心に響いた平和学習だったのでは、と確信しています。

2014年8月 吉永紀子



[平和学習にて]

○ くるみ保育園で育って

かずきが自閉症と診断されたのは2歳頃のことでした。

診断自体には、ショックというよりも、かずきの特徴ある行動はそういうことなのだな。と納得しましたが、では、はてさてどう育てたものかと悩みました。そんな時、市の保健センターで紹介されたのがくるみ保育園でした。

25年5月、かずきが3歳3ヶ月になった時から障がい児通所支援事業でお世話になり、お昼までのくるみでの生活でした。初めのうちは、お友達に興味はあるもののうまく関

われず、じっとしているのが苦手で、リズムも参加できませんでした。生野菜が苦手で、咀嚼も弱く、ごろごろと大きめのお野菜が入っているくるみの給食に慣れるのにも時間がかかりました。この頃の発語は、「ナナ(ママ)」「タタ(ぱぱ)」「なな、ぎゅーにゅ、飲むよ」「た、おふろ、ちゃっぼんよ」と三語文がやっとというところでした。そうかと思うと映画の主人公の長い台詞を同じようにオウム返しで言ってみたり、気に入った言葉や動きは所かまわず繰り返してみたりします。独特のこだわりや感覚過敏、多動性、自傷行為などに手を焼く事もありました。コミュニケーションが難しく、私や主人とは視線を合わせますが、声をかけられても、その人を見て視線を合わせることがあまりありませんでした。

しばらく通っていくうちに、泥に触るのも慣れてきて、土山がお気に入りになってきました。

でも、汚れていると気になって、落ち着きません。靴が濡れていると履きませんし、服は少し濡れただけで全部脱いでしまいます。どこでも脱いでしまうので、お出かけの時は注意が必要でした。ご飯は、駆け引きをしてもらいながら、好きなものと嫌いなものを交互に食べたり、小さくしてもらって食べたりして少しずつ慣れてきました。家庭でも、テレビを見せるのを止めたり、生活のリズムをしっかり作ることをアドバイスしていただき、取り組んでいきました。

そして、くるみで過ごすのが楽しくなってきた頃、「きうち」「あんどー」「れお」「みくたん」「ひおと」と他の人の名前が言えるようになってきたのです。最初にくるみに来たときは、先生方もみんな呼び捨てでいいのだろうか、と面食らったのですが、かずきのような子には捉えやすかったようです。

夏になると、大好きなプールが始まって、「ナナ、おっちなプール、あいっただよ」といって帰ってきました。ますますくるみに行くのが楽しみになったようで、登園はスムーズになりました。脱ぎ着もできるようになり、前後を間違えたり、こだわりで、好きな柄が前に来るように履いてみたり、「こえ、かたいよ(きついよ)」と言ってできないこともありましたが、ほとんど自分で出来るようになりました。トイレも誘えば行けていて、日中お出かけの時もパンツで行けていました。しかし、やっぱりじっとしているのは苦手でリズムは苦手だったようです。私は、じっとしておけないことを一番気にしていました。しかし、「心配しなくても、くるみで過ごしていたら大丈夫。みんなちゃんと出来るようになってます。」と保育士の方々が自信を持って励ましてくださって、とても心強かったです。

その後、順番も少しずつまもれるようになってきて、少し視線も合うようになってきました。大きな変化だと感じたのは、手を広げてぐるぐる回ったり、目の前で手を広げてブラブラしたりする常道運動がグッと少なくなったことです。そんなことをするよりも目の前に楽しい事が待ち受けているといった感じでした。

楽しいことが増えてくると比例して、言葉が増えてくるのがわかりました。8月の終わり頃、今まで「ナナ、タタ」という発音だったのが「ママ、パパ」と言えるようになり、自分のことを指さして「かじゅきー」と言えるようになりました。「かに、てみ(せみ)、かぶとむし、とり」と語彙も増えてきて、ご飯を作っていると、「ママ、かちてー、かじゅきも、それ、しゅるー」と言うように、言葉でのコミュニケーションがだんだん取れるようになってきました。

やっと慣れてきたかなと思ってほっとしていた頃、弟ができて、私が弟の世話ばかりしているのが嫌だったようで、「いやー、いやー」が始まりました。何をしてもイヤイヤ言って、お昼にくるみから連れて帰るのが一苦労でした。場面と場面の切り替えが難しく、一つのことから次のことにスムーズに移れずに、何か次のことをさせるたびに「イヤイヤ」と言って泣くことの繰り返しでした。「かずちゃんが赤ちゃんなのよー、あいとくんそっちに置いてよ」と言って抱っこをせがんだり、おしっこが一人でできなくなったりしました。

赤ちゃんがえりは健常の子でもあることだし、むしろ自我の芽生えを喜ぶべきと思いつつも、せっかくトイレも自立できていたのにと少し先行き不安に思いました。でも、ここまでくるみで過ごさせてもらって、「くるみで育ったら大丈夫」となんとなく思ってしまう自分もいて、焦らずにしっかりと子供達と向き合おうという気持ちになりました。

2ヶ月ぐらいになると、弟だとだんだんわかってきたのか、「あいとー、あいと、よしよし」と可愛がる場面が見られるようになり、くるみにいる赤ちゃん達にもとても興味を示すようになりました。

年度末になり、同じ障がい児通所支援事業のクラスの子達はそれぞれ違う保育園や幼稚園へ行くことになりました。かずきは、環境の良いくるみがとても合っていて、4月から入園させてもらうことになりました。

たかさんと一緒に過ごし始めた日は、慣れないながらも自然と過ごせたかなと思っていましたが、次の日、お昼寝の後すごく泣いて、どうしたのかきくと、「れお、来なかったの。みくたん来なかったの。残念だったの。」といてエンエン泣きました。寂しかった事に加えて、環境が変わったことに少し戸惑う気持ちもあったようです。

それでも、数日後にお友達できた？と聞くと、「うん。こーちゃん」と言っていて、その後は「うん、こうへいちゃんよ。」と言っていました。でも、こーちゃんは大人だし、こうへいちゃんは赤ちゃんです。また、数日後に聞くと、「うん。たけるとかいよ。」とたかさんメンバーが少しわかってきたようでした。

夕方までくるみで過ごすようになると、イヤイヤより、「自分で」という事が多くなってきました。少しずつ場面と場面の切り替えにかかる時間が短くなってきました。リズムも楽しさがわかってきたようで、くまさん、くまさんのリズムを教えてくださいました。言葉もたくさん出るようになって、「たける、こわいの走るするよ(鬼ごっこのこと)」「折り紙がハサミの切るのしよう(ハサミで折り紙を切るのしよう)」と語順や助詞の使い方がいまいちですが、たくさん伝えようとするようになりました。

とりわけ6月の中旬にあったお泊りが、最高に楽しかったようです。食事が終わったら、かずきは帰る予定でしたが、みんながお風呂に入りに行くと、自分も飛んで行って、あつというまにお風呂に入ってしまった。年長さんが竹串に刺して焼いてくれた魚を、ぱくぱく食べたとき驚きました。丸のままのお魚は苦手なはずなのに。「おたかな、こうやって、がぶって食べたの。おいしかったー。お風呂はいったのよ、たのちかったー」だそうです。

この頃から、また一人でトイレに行けるようになってきました。前までは、トイレに行くまでに少し濡らしていたのに、事前におしっこしたいと言えるようになってきました。

最近では、おしっこは一人でしっかりトイレでできるようになりました。場面場面の切り替えもかなりスムーズになり、言葉は、なんと「めっちゃん、早いやん」と河内弁を使うまでに。そして、時々「それ、ぼくの」と自分のことを「ぼく」といいます。弟を抱っこできるぐらい力がついて、危ないところに行こうとすると抱っこして連れてきたり、一緒にあそんであげたりして、とてもよく面倒を見てくれます。

入園して半期だけ過ごしてきただけで、めざましい成長が見られただけに、8月いっぱい、ここを後にしないといけないのは非常に残念ですが、やむを得ません。

幸い、引っ越し先は鹿児島島の大自然の広がる田舎町です。海、山、川、滝と何でもあるので、短い間でしたが、くるみで教わったことを糧に、のびのびと子供達を育てて行きたいと思います。

これまで、かずきの為に心を砕いてくださった皆様に心より御礼申し上げます。

誠にありがとうございました。

常川理恵

学童の夏

学童では、1年生から6年生までの子どもたちを縦割りにして班を作っています。6年生が班長になり、保育士が相談にのりながら班のメンバーを決めていきます。毎日、学校が終わり学童にやってきて、班を基本にして話し合いや活動をしていくのですが、平日の子どもたちは授業数も多く、帰りが遅いため、みんなで何かに取り組んだり、遊びを充実させたりすることは難しくなっています。毎月1～2回行っている土曜日の活動日にむけて、班長会議を行い、しおり作りをすることで精一杯です。

夏休みになると、朝から一日一緒に生活をする中で、話し合いをし、色々な遊びをすることができます。5・6年生が中心になり話し合いを進め、班をまとめていきます。どの子どもも楽しめるよう特別ルールを決めたりして、自分達で遊びを工夫しています。1年生も苦手な遊びでもルールを教えてもらい挑戦しています。

夏の初めに行った「川遊び合宿」では、橋の上から飛び込んだり、足のとどかない所で泳いだり、魚のしかけを作って魚とりするなど、一人ではできないこともみんなの中だからできることもあり、勇気を出して挑戦したことで自信もつけてきました。学童のお父さん・お母さんの協力で、川でのダイナミックな遊びを体験することができました。夜には子ども達の希望で「きもだめし」をし、朝はみんなで朝食作りをしました。「川遊び合宿」を夏の初めに行った事で、班長が自分の班の小さい子のこともわかり、その後、一緒に活動する姿も見られ、班活動がスムーズに進みました。

そのほか、この夏の間、週1回のお弁当・昼食づくりをしたり、藍染の体験をしたりと、たくさんの人の協力があり充実した生活を送ることができました。

また、夏の生活の中で大切にしていることの一つに、平和について考えることがあります。5・6年は平和学習に出かけますが、8月6日・9日には「今日は何の日？」と問いかけ、その時に、戦争に関するお話の読み聞かせをし、戦争の怖さを伝え、平和について考えるきっかけとなるように取り組んでいます。



【流しそうめんもしました】

学童には特に遊ぶ道具がいっぱいあるわけではなく、自宅からゲームなども持ってこない約束にしています。子どもたちは場所があれば、そこにある物で創造的に遊びを作りだしていきます。ボールがあればみんなで遊び、ダンボール・紙、ハサミなどがあれば色々な道具を作り、大人が考えもしないような遊びで楽しんでいます。物が溢れている今、くるみの学童の子どもたちは、余計な物がない中で、想像力を膨らませ、遊びを作りだしています。一人ではなく、仲間と一緒に遊ぶから楽しいということが、自然に身についていると思います。一人一人個性もあり、激しいけんかをする事もありますが、自分の思いを相手に伝え、相手の話も聞き、お互いに話をして決着することを学びます。いろいろな人間関係の中で自制心も育ち、コミュニケーションの力もつけてきていると思います。

2015年度版「保育カレンダー」の普及にご協力をお願いします

子育てが孤立化され、迷い悩んでいるお父さん、お母さん。保育園は、子育ての経験と知恵がたくさんあるところです。ぜひ「訪ねて来て下さい、保育園に」という思いで普及しております。

どんなに世の中が変わっても、人間らしく生きていく力の土台をつくる乳幼児期は、身近な人に愛され、水や砂や土と遊び、風までも食べての散歩など、実体験で五感をしっかり使い、その年齢を生ききらせることが大切です。そのことが、人を愛し、考える力を培うからです。

カレンダーの絵は、どの絵も、父母、保育士、周りの大人たちが子どもを真ん中に力を合わせて、子どもの内に秘めた力が花開くようにと願い、協力している園の子どもたちが描いた絵です。特に行政から財政的な支援の無い未認可園での大人たちの努力には並々ならぬものがあります。

めまぐるしく変化する世の中。子どもたちのこれからについても、考えさせられることが多くあります。そんなとき、『保育カレンダー』の中で、きらきら輝く子どもたちに会っていると、「大丈夫、子どもの未来を真剣に守っていこうとする大人たちがいる限り、これからも変わらず子どもたちは育っていく」と思えます。

子ども時代を目一杯に謳歌させ、“子育てに科学とロマンを求めて”子育ての楽しさを保育カレンダーを通して多くの方々にお届けしたいと思えます。(保育カレンダーHP <http://www.hoiku-c.net/>より抜粋)



[定価 1200 円]

《くるみと保育カレンダー》

このカレンダーは、埼玉県の「さくら・さくらんぼ保育園」の保育を学び、実践する全国の保育園・幼稚園が共同で作成しています。

豊かな自然環境の中で思う存分遊び、仲間と生活した子どもたちの描く絵。

そして、子どもたちの「子どもの可能性を感じて欲しい」「子どもたちの内に秘めた力が花開くように」という思いを込めた保育者たちからのメッセージ。

「こんな子育てがあるんだ！」と多くの方に知って頂けたら嬉しいです。

くるみは認可外保育園のため、「父母の会」がこのカレンダーやバザーなどの財政活動を行っています。

皆さまの温かいご支援・ご協力をよろしく願いいたします。

お問い合わせは TEL:072-957-3282 (12:00-17:00) もしくは
mail: kurumi@kosodate-kurumi.com カレンダー担当まで

